

初期の段階

休み明けや特定の教科があるときに遅刻や欠席が目立つようになり、やがて頭痛・腹痛・発熱などの症状を訴えて、欠席が数日続くようになる。

- ・保護者も学校も原因の追及をしすぎず、現在のストレスの軽減を図る。
- ・学校内での居場所を用意しておく。
- ・保護者との話し合いをする。（家庭内でも本人の意思を尊重するようにお願いする。）
- ・「続けて休まないようにしましょう」と、柔らかい提案をする。

欠席が続くようになり、登校をせまると保護者との衝突が激しくなる。保護者はとまどい、自らの対応に不安を抱くとともに、学校への不満や不信感をつのらせることもある。

休みが続くようになった段階

- ・働きかけの目標を再登校から本人の心理的安定へと置き換える。
「学校に行くか行かないかではなく、大切なのはあなたが元気に、生き生きと生活できることだよ。」
「今は、将来一人で生きていくための準備の時間なんだね。一緒にゆっくり考えよう。」
- ・定期的な家庭訪問による保護者支援に重点を置く。
- ・家庭内での居場所づくりをお願いする。（家族の大切な一員であるという実感をもたせること）
- ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどとの連携や相談機関の紹介を積極的に行い、学級担任や保護者が問題を抱え込まないようにする。

休みが長期化した段階

学校や家族との接触を避けようとし、しばしば昼夜逆転した生活になったりするが、学校の話を持ち出さなければ、以前のような激しい衝突は見られなくなる。

- ・家庭訪問や電話連絡による緩やかな接触を継続していく。
- ・家庭内での簡単な手伝いをさせるように頼んで、褒める機会を増やすように保護者をお願いする。
- ・保護者の了解を得て、本人の様子などを学級に伝える。
- ・家庭内での小さな変化を見逃さないように保護者に話しておく。
(例えば、友達や学級の事を尋ねたり、家族と話すようになった、身だしなみを気にし始めた、テレビを観て笑った、など)

比較的安定して家庭で過ごせるようになり、興味のもてる活動に自発的に取り組むようになる。外出が容易になり、学校からの接触に対する抵抗も弱まってくる。

再び学校に近づき始める段階

- ・家庭訪問時に本人に会えるようになったら、本人の様子に応じて簡単な学習プリントを渡し、次回の訪問時までにはやっておくように伝える。
- ・子どもが示してくれる接触のチャンネルを活用する。（漫画、ゲーム、趣味など）
- ・保護者には、学習面での本人の努力や進歩などの肯定的な面を積極的に伝える。
- ・家族で協力して、再登校に向けて、生活のリズムを整えていく。

学校に行き始めた段階

自分なりに目標や計画を立てた行動がみられるようになり、散発的に登校が始まる時期。保健室登校や別室登校の形態をとるのが一般的なもので学校側の受け入れ態勢を整える。

- ・登校に向けて本人も合意できる目標を立てる。
- ・学校内での居場所を用意しておく。
- ・保健室や別室の外に出る機会、同級生との接触の機会、教室復帰の手順などを話し合う。
- ・せっかく登校したのだからと学校に長くとどまらせようとしめない。
- ・保護者には、この時期の登校は本人にとってずいぶん疲れるものであることを伝える。